

はっちオープニング
アート・プロジェクト



2011 年 2 月 26 日～3 月 30 日に写真展を開催。（震災により会期延長）

八戸市民と梅佳代、浅田政志、津藤秀雄 3 人の写真家のコラボレーションによるコミュニティ・アート・プロジェクト。

88 人の市民ライターがそれぞれに、自分の家族や友人、八戸で活躍している人などの被写体を取材し書き上げた文章をもとに、3 人の写真家が肖像写真を撮影し展示した。

2010 年 8 月から約半年をかけて行われた取材・撮影には約 400 人の市民が参加。その過程で人々が出会い、さまざまなドラマが生まれ、それぞれの方自身が周囲の人々との絆を確かめ合うこととなった。

展覧会開催中に東日本大震災が発生し、くしくも「ハチレビュー」で描き出された人々の姿は、地域に暮らし生きる人々のたくましさや命のきらめき、その大切さを写し出す強いメッセージを放った。

会期中、約 3 万人が訪れたこの展覧会は大きな反響を呼び、アートディレクターの森本千絵氏にアートディレクションをお願いした記録写真集は、全国で販売された。

- 制作に参加した市民／約 400 人
- 展覧会来場者数 ／約 30,000 人

■アーティスト・プロフィール ※プロフィールは 2011 年 2 月時点のものです。



梅 佳代 [写真家]

1981 年、石川県生まれ。2002 年、日本写真映像専門学校卒業。2007 年、ファースト写真集『うめめ』（2006 年）が異例のベストセラーとなり、第 32 回木村伊兵衛写真賞に輝く。2010 年は『男子』（2007 年）、『じいちゃんさま』（2008 年）に続く、最新写真集『ウメツ』を出版。写真展「ウメツ：シャッターチャンス祭り」を東京、大阪で開催した。その他、新聞、雑誌等での写真連載や国内外での展示を数多く手掛けている。



浅田 政志 [写真家]

1979 年、三重県生まれ。2000 年、日本写真映像専門学校卒業。2004 年、東京・スタジオフォボス勤務。2007 年、写真家として独立。2008 年、写真集『浅田家』を出版。第 34 回木村伊兵衛写真賞に輝く。以降全国各地で浅田政志写真展「浅田家」開催。2010 年、三重県立美術館にて「Tsu Family Land」浅田政志写真展開催。写真集『NEW LIFE』を出版。その他、各地のアート・プロジェクトに多数参加している。



津藤 秀雄 [写真家]

1962 年、宮城県生まれ。1984 年、六本木アートセンター勤務。1985 年、齋藤元氏に師事。1997 年、仙台にて FIELD 設立。1999 年、スペシャルオリンピック、オフィシャルカメラマンとして参加。全国各地にて、写真展開催。ライフワークとしてさまざまな市井の人々の肖像写真を撮影している。社団法人日本広告写真家協会会員。



木村 友祐 [作家]

1970 年青森県八戸市生まれの作家。2009 年『海猫ソリーハウス』で第 33 回すばる文学賞受賞。東京都在住。



佐藤 尚之 [クリエイティブディレクター]

1961 年東京生まれ。クリエイティブディレクター。ACC 賞、JIAA グランプリ、カンヌ銅賞、日刊新聞広告賞グランプリなど受賞多数。個人サイト「www・さとなお.com」（http://www.satonao.com）を運営。「さとなお」の名で著書多数。『人生ピロピロ』（角川書店）、『沖縄上手な旅ごはん』（文藝春秋）、『うまひゃひゃさぬきうどん』（光文社）、『明日の広告～変化した消費者とコミュニケーションする方法』（アスキー新書）など。



88 人の市民が取材し書きあげた 88 のストーリー。
八戸の人々の日常を、新進気鋭の写真家たちが撮影。
多彩な人生と、人と人との絆が浮かび上がるコミュニティ・アート・プロジェクト。

みんなの日常、
みんなの街、
みんなの「生きる」

日々変化しながら、
創造的に、革新的に、持続的に
八戸に生きる人たちがこそ、
八戸そのものの姿。
そして、そこに浮かび上がった人と人との絆こそ
八戸の未来をつくるチカラ。

ハチレビュー

八戸市民
梅 佳代
浅田 政志
津藤 秀雄
木村 友祐
佐藤 尚之

2011年2月26日(土)ー3月16日(水) 開催時間＝9:00～21:00 (2月26日は13:00～/3月16日は17:00まで)
◎八戸ポータルミュージアム はっち ◎入場無料
主催：八戸市〔八戸ポータルミュージアム はっち〕
後援：八戸商工会議所 株式会社まちづくり八戸 八戸中心商店街連絡協議会 八戸観光コンベンション協会 デーリー東北新聞社 東奥日報社 HTV八戸テレビ コミュニティラジオ局 BeFM



クリエイティブディレクターの佐藤尚之さんには、展示会場で最後まで読んでいただけるようなわかりやすい文章にしようとアドバイスを受け、何度も文章を書き直した。
また、市民ライターのみなさん同士で、文章を読み合いアドバイスをし合う集まりも何度となく行われ、短い中に、人生ドラマがずっしりとつまった88の物語が書き上げられていった。

氷上結婚式は 八戸レビューの おかげです。

市民ライターとして参加した田島尚幸さんと被写体のマイケル・スミスさんはホッケーチームのメンバー同士である。

田島さんが取材相手として選んだマイケルさんは、日本人の奥さんと暮らしているカナダ人。「若くてノリがいいし、カナダ人だからという理由でマイケルを選びました。取材でじっくり話してわかったことは、彼は本当に八戸が好きで、奥さんが好きでカナダから八戸に戻ってきたんだということ。ほんとナイスガイですよ！これをきっかけに、ますますマイケルと仲良くなりました。」と田島さんは話してくれた。

木村友祐さんの文章指導を受けた田島さんは、添削赤字がたくさん入っていたのに驚いた。その赤字をもとに、思い切って構成を変えて再提出してみた。すると、木村さんから「私の赤字だけで、よくここまで変えましたね！」とお褒めのコメントをもらい、とても嬉しかったと振り返った。

また、写真家の浅田政志さんについては「人を笑顔にさせたり、場を和ませるのがうまいと感じま

した。人見知りの人でもコミュニケーションが自然と運びそうですよね。その人にまつわる様々な要素を集めて写真を作っていく手法がすごいと思いました。」

浅田さんと打合せして、マイケルさんの写真は、本当のスケートリンクの上で結婚式をやっているシーンにしようということになった。当初は「結婚式風」の撮影という予定だったのだが、その話を聞いたホッケーチームオーナーが、「マイケルさんはまだ結婚式を挙げていない。良い機会だから本当の結婚式をやろう。」というひと言で、「八戸レビュー」の撮影を彼らの本物の結婚式にしようということになった。

深夜のホッケーリンクに100人を超す友人たちが駆けつけ、本物の神父さんがマイケルさん夫婦を祝福してくれた。

ホッケー仲間がスティックでハート型の風船を空中に打ち上げる中、愛のあふれる一瞬が撮影された。

リンクを溶かすような熱い撮影現場。プロジェクトが新しいドラマを産み出した。



撮影のために氷上結婚式を挙げたマイケル・スミスさん



マイケルさんを取材したチームメイトの田島尚幸さん



取材活動を前に、公募で集まった市民ライターのみなさん。いい取材をしようと、コミュニケーション・ワークショップでトレーニング。



八戸市立市民病院の救命救急センターの今先生に突撃インタビュー！



中心街のお茶屋さんのご主人にお話を伺う。



インタビューして書き上げた400字の物語を、作家の木村友祐さんに読んでいただき、アドバイスしてもらう。文章を磨き抜く。



養豚を営む久保裕子さんと農場でロケハン



ご家族と一緒にになると表情が柔らいだアマチュアカメラマンの小川篤史さん



裂織制作者の関根保弘さんの作業場で



タイヘイ牧場で馬に蹴られながら六郎田靖さんを撮影



北日本造船にて／被写体は松村寿樹さん



女子レスリングの小原日登美さんの撮影は試合さながらの真剣さ



早朝の海で漁師の熊谷博史さんを撮影



弦楽奏者の指導者であり音楽家の高橋良之さんの撮影は、場所を変えて二度行われた。公会堂で行われた二度目の撮影の際、高橋先生の視線の先には何十年も連れ添ってきた奥様がいらしゃった。高橋ご夫妻と津藤氏との親交は続き、東日本大震災後、高橋夫妻のご自宅の片付けを手伝おうと、津藤氏は再び八戸を訪れた。

津藤秀雄

津藤さんは、文章を読んで、被写体になる方に実際に会ってじっくりと対話した。その会話から、どんな場所で撮影したらいいか、どんなシチュエーションがいいのか考え、相談を重ねた。撮影場所が決まると、彼はロケハンに出かけ、光の状態を緻密に計算して、撮影時間、撮影場所を決定した。現場では、被写体の方に「大切な人の姿を思い浮かべてください」などと静かに語りかけながら、撮影が行われていった。ひとりひとりの人柄や生きてこられた時間が静かににじみ出てくるような写真になった。デジタルカメラで撮影。

2010年、秋。
市民ライターのみなさんが推敲を重ねて書き上げた文章を、3人の写真家 梅佳代さん、浅田政志さん、津藤秀雄さんに読んでいただいた。



八戸ロケハン



津藤さんの作品を展示したシアター2は、静かな空間になった。黒い空間に写真一点一点が浮かび、輝いていた。市民ライターのみなさんが書き上げた珠玉の文章は、ひとつひとつ譜面台に置かれた。まるで、ひとりひとりの人生の時間が響き合い、美しい旋律が聞こえてくるかのような会場になった。会場では2月27日に、コンサートも行われた。ライターとして恩師高橋良之さん取材した、弦楽奏者の澤向直子さんが恩師とともに演奏した。演奏を聴きながら、ひとりひとりのかけがえない人生に改めて思いを馳せ、多くの人々が涙した。



漁師の熊谷博史さんを撮影した津藤さんの作品写真。

誇張ではなく、発見と驚き、感動の連続でした。

梅さんの瞬間的な撮影は名人芸！あれを「写真力」と呼ぶのでしょうか。浅田さんには奇想天外なアイデアに毎回度肝を抜かれました（つけ鼻や造花の水仙100本！などを探し回ったのも懐かしい思い出です）。津藤さんの撮影は真摯で、人生全てを1枚の写真の中に写しこむ魔法のようでした。

ライターの方の文章も必読！というより、ここでは文章あつての写真。木村さんと佐藤さんの指導が文章の魅力をアップしました。ある人は苦労と幸福の人生、ある人は愉快で真面目な毎日……。こんなにも多くの人生があるという当たり前の事実の素晴らしさがここには溢れています。

イカが特産の八戸だけに、豊かな味わいを未だに失わないスルメのような「八戸レビュウ」。まだの方は写真集でどうぞ。

渡邊曜平

（企画運営グループコーディネーター）



浅田政志



上館煎餅店で撮影計画を上館さんに語る浅田さん。

上館煎餅店を訪れた浅田政志さんは、店主の上館一雄さんに、大好きなパークゴルフ場で煎餅を焼くシーンを撮影したいと申し出た。
『なぜそんなことをしなくてはならないのか?』上館さんにはまったくわからなかった。しかし、請われるがままに、上館ご一家とパークゴルフ友達が、寒風吹きすさぶ厳冬のパークゴルフ場に参集した。
こだわりの煎餅を焼き続けて来た職人気質の上館さんの背中に、煎餅焼き用コンロのガス管を差し込む浅田さん。せんべいを口にくわえる往年の紳士たち。奇想天外な状況に、いつのまにか現場にいる全員が、『おもしろい写真にしたい』『楽しんじゃえ』という心境になつていく。そんな空気が満ちて、シャッターが切られる度に活力が発散される。
浅田さんの撮影現場には、いつも「熱」と満面の笑顔があった。撮影しながら、自分自身の中にある子どものような遊び心に、だれもが気づいていったにちがいない。



パークゴルフ場での撮影風景。とても寒い現場だったが、撮影には熱い空気があふれていた。完成作品は写真集でご覧ください。



田島尚幸さんの取材がきっかけで、氷上結婚式を行ったマイケル・スミスさんと奥様を撮影した浅田政志さんの作品(上・67ページ参照)

氷上で行われた本物の結婚式(右中・右下) 結婚式の後、いよいよ作品の撮影開始(左中・左下)

浅田さんは、市民ライターの文章を手に被写体になる方を訪ね、その文章に描かれたシーンを再現して撮影するための打合せを綿密に行なった。
その過程で、人の縁が紡ぎ出されて、広がっていった。アイスホッケー・リンクの上で、本物の結婚式が行われたり、寒風吹きすさぶパークゴルフ場でせんべいを焼くシーンを撮影することになったり、高所作業車での撮影が行われたり、思いもかけない撮影現場が出現した。
撮影現場は、まちの人と人との縁を結び、確かめ合う場になった。すべてフィルムに撮影。

浅田さんの会場は、八戸が誇りとするもの、自慢したいことをベースに演出された。
八戸三社大祭の山車を彩る市民の造形力を活かした展示をしようと、山車組に発泡スチロールで大きなせんべいを作ってもらい、その上に市民ライターが書き上げた物語をしたためた。また、ウミネコの首には、物語がぶら下げられた。



雪が降る中撮影された写真の額縁の上には、人工雪を積もらせた。

まるで瞬間冷凍されたような、八戸を象徴するさまざまなものたちは、高所作業車から撮影された。
下はせんべいに書かれた、ライターの文章。



浅田さんの撮影現場には、毎回さまざまな小道具が必要になった。スタッフは毎回、その調達に駆けずり回った。みんなで力を合わせて、1枚の作品を創り上げていく醍醐味を、どの撮影現場でも全員が実感した。そして、居合わせた者がみんな元気になるっていった。
あるときは高所作業車を調達。雪の上に、八戸を象徴するさまざまな「もの」を並べて俯瞰で撮影した。その写真はまるでそのまま冷凍庫に入れられたがごとく丸く切り取られ、アクリル板にプリントされて会場を飾った。
アーティストの作品づくりの現場は、年齢や地位、立場、損得といった社会的な縛りから人を解放する。現場では、だれもが子どものように無邪気に、テーマを表現しようとする。眠っていた創造性が目を覚まし、口々にアイデアを出し合い、無心楽しい時を共有する。浅田さんは忘れられない思い出を、各現場で創り出した。

八戸三社大祭の山車でおなじみの波しぶきのもと、特別に作ってもらったウミネコの首に、市民ライターの書き上げた文章が下げられた。



梅佳代

もっとも遅い時期に撮影が始まったのは、梅佳代さん。梅さんは市民ライターが書いた物語を読むと、いきなり撮影に向かう。撮影する場所がどんな場所なのかを気にする様子は全くなかった。

現場に到着するとたいいてい、被写体の方にあいさつが終わ

るか終わらないかの瞬間に、すばやくシャッターを切る。「もう終わりですか？」と聞きたくなるほどの短時間でいつも撮影は完了した。シャッターを押す回数もきわめて少ない。それなのに、できあがった写真には、決定的ない表情が焼きつけられていた。



古川京子さんが働く陸奥湊駅前朝市で、バッグを提げたまま撮影。



田端美紀さんのお宅では、初対面にもかかわらず友だちのようにおしゃべりがはすむ。



青山いく子さんのお店、れんざ街の「草」で、イカをさばく。



大久保テルさん宅の玄関先で。ごあいさつもそこそこに最高の表情がカメラにおさめられていた。



岩岡徳衛さんと愛犬。飼い主はもちろん犬までしっかりとカメラ目線で決まりました。



ドクターヘリを気さくに見せてくださった、市民病院の今明秀先生。

梅さんの声は、玉のようにかわいい。石川訛りののどかなイントネーションは、相手に警戒感を与えない。そして、あれよあれよという間に、被写体に迫る。ドクターヘリをバックに立った今先生には、あっという間にレンズとの距離が30cmにまで近づいていた。

そんな一瞬の撮影時間で撮影された写真に映る、自分自身のいきいきとした表情にだれもが驚いた。取材してその人をよく知る方々も、初めて見るようなその人が、梅さんの写真に存在したからである。すべてフィルムに撮影。

展示直前に、梅さんの展示仕様は決まった。写真をパネルに直接貼り、その下に市民ライターのみなさんが直自分の文章をマジックで書くということになった。学校帰り、仕事帰りにはちにやってくるライターのみなさんの熱気が、設営現場にあふれた。



仕事帰り、学校帰りに、パネルに直接文章を書きつける市民ライターのみなさん。



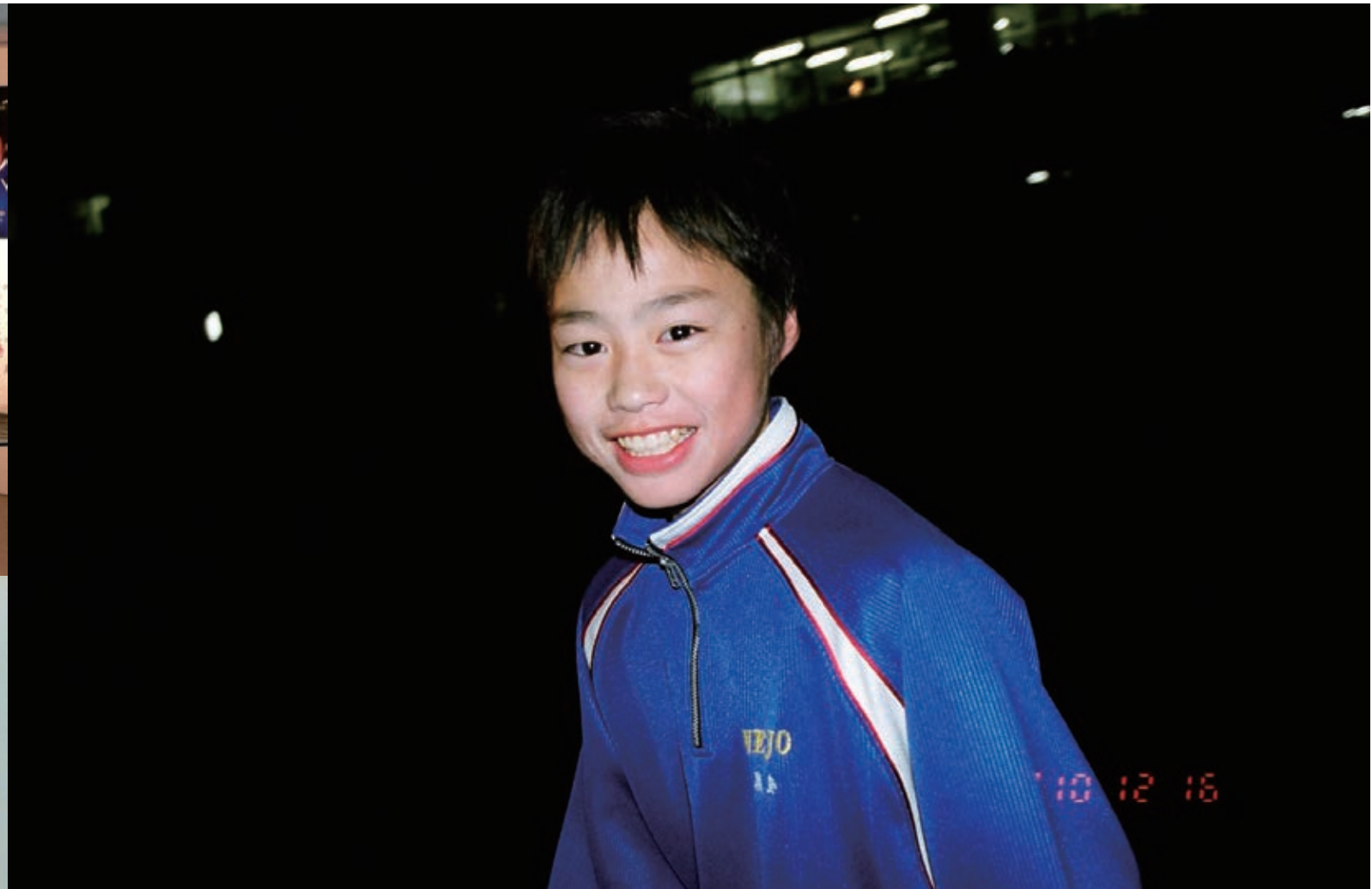
手書き文字と梅さんの写真が脈打つようなエネルギーを発散している梅さんの展示会場。市民のみなさんと最後まで協働して創り上げた会場だ。



梅さんの写真の展示会場では、パネルに直接写真を貼り付け、ライター自らが書いた文章を、パネルに直書きすることにした。梅さんが切り取った市民の生き生きした表情とライターのみなさんの手書きの文字が、熱いエネルギーを生み出した。

2010年10月から始まった「八戸レビュー」の3人の写真家による撮影には、延べ400人以上の市民にご参加いただいた。市民ライターのあたたかい視線、八戸の今を生きる人たちの姿を生き生きと描き出した写真家のみなさんの情熱と感性、写真家それぞれに市民協働で創り上げた展示会場。

「八戸レビュー」は、市民と協働で創り上げた壮大なコミュニティ・アート・プロジェクトである。



衝撃的な出会いだった。梅佳代さんに同行することが多かった私は、噂には聞いていたものの、その撮影の早さ、というか、被写体の懐に入り込み、一瞬にして虜にしてしまうスピードに圧倒された。

初めて会う人は、誰しも警戒感を少しは伴うものだろうが、相手にその警戒感を持つ時間さえも与えず、その人間が持つ魅力を引きずり出してしまふ。きっと撮影していた時間よりも、その後の世間話の方が時間が長かったのではないだろうか。そしてフィルムで撮影していた彼女は祈るように言う。

「うん、撮れているはずだ。何と魅力的な言葉だろう。」

そして梅佳代さんの別れ際の言葉。「ベンさんの話しかけてくれた八戸弁は、半分以上は分からないかった」。これもまた衝撃的な別れだった(笑)。

田中 勉

(平成22年度企画運営 グループリーダー)



蓮くん直筆の取材文によって、大くんの笑顔がますますいきいきと輝いた。



完全に日が暮れて、暗い撮影現場だった。それでも梅さんは黒島大くんの輝くような笑顔を印画紙に焼きつけた。



「八戸レビュー」再展示
横浜トリエンナーレ連携プログラム「新・港村」会場にて。
写真家の3人をはじめ、内田真由美さん、森本千絵さん、小林真市長ほか
「八戸レビュー」に関わった八戸市民、アート関係者で、オープニングはにぎわった。

多くの市民と写真家が協働して創り出した「八戸レビュー」。
オープニングのトークにはたくさんの市民が集まった。
浅田政志さんは厳寒の蕨島で、ウミネコになりきって大撮影
大会を敢行。東京からやって来た参加者も、八戸の醍醐味を体
感した。
「八戸レビュー」は、小ささまざまな発見を私たちにもたら
した。ひとりひとりが、それぞれの場所で懸命に生きているこ
と、その一人が多くの人たちに支えられていること、名もなき
人々の人生のかけがえのないきらめき、固有の生活文化の価値、
人々の想いがこもる八戸の風景の美しさ…。改めて気づかされ
たことが多々あった。そして何より、まちを創り出しているの
は『人』であるということを改めて気づかせてくれた。
会期中中の3月11日に東日本大震災が起き、多くのまちが大
津波で流された。「八戸レビュー」は期せずして、打ちひしが
れた人たちを励ますメッセージとなった。
それは、人さえいれば、人が生き生きと生きていさえすれば、
まちはできる、必ず復活できる、というメッセージである。



八戸レビュー写真集は7/16に全国の書店に並んだ。
八戸レビュー88
～梅佳代、浅田政志、津藤秀雄 3人の写真家と
88のストーリー～
装丁：森本千絵 販売価格：税込 2,000 円
出版：美術出版社



「八戸レビュー」のオープニングにやって来た、アートディレクター
の森本千絵さんが、「八戸レビュー」の記録集のアート・ディレクショ
ンを引き受けてくれることになった。アート・コーディネーターの
内田真由美さんのコーディネートで実現し、美術出版社から発売さ
れることになった。「八戸レビュー」のような仕事をしてみたいとずっ
と思っていたと森本さん。このプロジェクトのプロセスが見事にわ
かる、すてきな本にしてくれた。
2011年7月16日、全国の本屋さんに『八戸レビュー』が並んだ。
さらに、内田真由美さんのコーディネートで、ヨコハマトリエン
ナーレ2011特別連携プログラム「新・港村」のギャラリーにて、
8月6日～31日に「八戸レビュー」は、作品を抜粋して再展示された。
森本千絵さんがデザインしてくれた壁面の内側に、『八戸』が出現し
た。横浜でも約1万人の観客が「八戸レビュー」を訪れた。
2012年2月、「八戸レビュー」は、アプリ「i8nohe」で
も見られるようになった。
地域には心から幸福を感じることができる、生きる、場がある。
「八戸レビュー」は東北の地方都市「八戸」からの、時代に先駆けたメッ
セージである。



アーティストトーク

「八戸レビューの先にみえたもの」

3人の写真家が撮影を通して感じたこと、市民の取材から浮かび上がってきたものを検証したアーティ
スト・トーク。

2月26日(土) 17:30-19:30

会場＝八戸ポータルミュージアム はっち1F「はっちひろば」

出演＝梅 佳代、浅田 政志、津藤 秀雄 進行＝吉川 由美(はっち文化創造ディレクター)

参加者 120名

3人の写真家とともに、「八戸レビュー」の撮影エピソードを紹介しながら、市民と協
働で創り上げたプロジェクトの全貌を振り返った。「八戸レビュー」がとらえた八戸の
人々のエネルギーと輝き。人こそまちを創るすべてであるということを再確認した。

「津藤 秀雄のギャラリーツアー」

津藤秀雄さんが作品展示会場で、自ら作品解説を行った。
市民ライターとして参加した澤向直子さんと被写体となった高橋良之さんによるコンサートも行われた。

2月27日(日) 10:30-11:30

集合＝八戸ポータルミュージアム はっち2Fシアター2

参加者 40名

津藤氏による作品解説と、ライターの澤向さん、恩師の高橋さんによる演奏会を開催
した。ひとりひとりの人生に思いを馳せる深い時間となった。

アーティストトーク

「今、梅佳代的コミュニケーションの波紋」

なぜ今、梅佳代さんの写真に人はひきつけられるのか、梅佳代マジックの秘密について語り合う、アー
ティスト・トークを開催した。

2月27日(日) 15:30-17:00

会場＝八戸ポータルミュージアム はっち5F「共同スタジオ」

出演＝梅 佳代、佐藤 尚之、内田 真由美 進行＝吉川 由美(はっち文化創造ディレクター)

参加者 100名

今、大人気の写真家 梅佳代さんの魅力に迫った。決定的瞬間を確実に焼きつけてしまう彼
女の鋭い感性が産み出す独特のユーモラスな世界について、写真家本人と語り合った。

内田 真由美 プロフィール

アートコーディネーターの第一人者。三重県生まれ。草間彌生氏、中川幸夫氏、荒木経惟氏など多くのアーティストとの画期的な仕事で知られる。
日本屈指の現代美術のコレクター、精神科医・高橋龍太郎氏の1000点以上に及ぶコレクションの中から、「neoteny(幼形成熟の意)」をキー
ワードに構成した「ネオデニー・ジャパン―高橋コレクション」をプロデュース。展覧会は2008年～2010年に全国の7美術館を巡回した。2009年、
三菱一号館竣工記念写真展「一号館アルバム ― 梅佳代、ホンマタカシ、神谷俊美、3人の写真家による三菱一号館復元の記録」を企画。また、
2010年8月に東京・表参道ヒルズで行われた「梅佳代写真展・ウメツプ シャッターチャンス祭り in うめかよひるず」もプロデュースした。



撮影体験ツアー

「浅田 政志のウミネコになるべ!」

ウミネココスチュームを制作して身につけ、ウミネコの繁殖地蕨島でウミネコの群れになり
きって、浅田政志さんの屋外撮影に参加する体験ツアーを催行した。

2月27日(日) 10:00-16:00 撮影地：八戸市蕨島周辺

参加者 54名

浅田政志さんは、会期中にウミネコになりきって蕨島で写真を撮影するミニ
ツアーを行った。ツアーでは、「八戸レビュー」参加者の関下齊さんがウミネ
コの鳴き声の声帯模写を披露してくれた。全員でウミネコの群れを蕨島の海
辺で再現し、浅田さんが撮影した。東京から大勢の方がこのツアーのために
八戸を訪れてくれた。

浅田政志さんは NHK 教育テレビの「高校講座 芸術」の番
組収録のために4月に再び八戸を訪れ、八戸の7つの高校
の生徒と写真ワークショップを行った。テーマは「スーパ
ーチェンジ」。劇的变化の瞬間のシーンをつくって撮影する
というワークショップをはっちをメイン会場にして実施し
た。高校生たちは各チームごとに、八戸のまちの人たちと
関わりながら、ドラマティックな写真を撮影した。
※参加高校／八戸東高等学校 八戸工業大学第二高等学校
光星学院高等学校 八戸工業高等学校 八戸中央高等学校
八戸聖ウルスラ学院高等学校 千葉学園高等学校



高校生たちが砂場で撮影した競泳シーン。
必ず全員参加で、セルフタイマーで撮影をする。
高校生たちはチームで力を合わせて「スーパ
ーチェンジ」の決定的シーンを撮影した。

